

「農と食」 北の大地から

連載第 204 回

家畜福祉(アニマルウェルフェア)の 普及をめざした歩みを振り返る

筆者がアニマルウェルフェア(家畜福祉・AWと略)の問題を勉強し始めてから、すでに20年ほどの歳月が流れた。「家畜に福祉?何それ!」と首を傾げる人が多かった時代は終わり、一定数の人がこの言葉を認知するようにはなった。普及に向けた「そよ風」は吹いているが、本気でAWの問題に関わろうとする人材はまだまだ少ない。店頭に並ぶパック詰めされた畜産食品の価格や味には敏感でも、それを生み出す動物たちの劣悪な飼育環境にまで関心を向ける消費者も多くはない。AWの基本は、それぞれの動物の習性や生態、生理によく学ぶこと。その原点に立ち返り、「学びの場」を創ることも必要ではないか。自身の歩みを振り返りながら、今後に向けた課題などを考えた。



▲「農業と動物福祉の研究会」が酪農学園大学で開催したAWシンポジウム(2005年7月)

◀日本の養豚業界はストール飼いが主流。母豚たちは狭小な環境に拘束されている

人と動物とのより良い関係を目指す 啓発は道半ば。今後は「学びの場」を

牛や馬が育ててくれた少年時代
狂牛病取材を契機にAWに関心

道北の下川町の戦後開拓地に生まれ育った少年時代(60年代前半)、わが家では10頭ほどの乳牛や数10羽の鶏、農耕馬、羊を飼い、田んぼや畑も作っていた。
子どもも働き手として扱われ、乳搾りをしたり、牧草地に牛を連れて

行くなどの仕事をよく手伝った。開拓地の電化は遅れ、東京オリンピックの前年(63年)まではランプ生活。手で乳搾りをするしかない時代だったが、自然に動物たちとの接し方を体得できた。牛や馬のおかげで成長させてもらったわけで、貧しくとも張りのある生活はわたしの原風景になっている。
人と家畜との距離は近く、経済動

物と呼ぶ人はまだいなかった。経産牛1頭あたり年間平均乳量は3千キロ余り(現在の3分の1ほど)。牛の食べものは牧草やデンコーン、稲藁、家畜ビートといった粗飼料が大方だった。米国産トウモロコシなど濃厚飼料を大量に与え、ミルク製造マシンのように酷使する今とは違い、家族の一員として丁寧に接する意識が強かったように思う。

有畜複合経営が多かった北海道の農村風景が大きく変容するのは、70年代の後半からのこと。夏場の放牧が減って舎飼いが増え、庭先養鶏や小規模な養豚も減少の一途をたどる。年を追って、大規模・機械化された畜舎の中で、動物たちを拘束する飼いが主流になっていった。
2001年9月、千葉県内で飼われていた佐呂間町産の乳牛がアジア



で初の狂牛病(牛海綿状脳症・BSE)と確認され、各地で感染牛の発生が相次いだ。
かねてから効率化や規模拡大に走る酪農のあり方を疑問視していたわたしは、「これは草食動物に共食いを強いた結果ではないか」と直感し、生産サイドの実態を中心に取材を重ね、翌年、『狂牛病を追う』(七つ森書館・絶版)を上梓。本シリーズ「農と食」の第1回(2002年8月号)のテーマも、「狂牛病対策その残された課題」とした。

本シリーズ連載開始から間もなく、道内の自治体で初めて独自の「有機牛乳生産基準」を創った、道南の瀬棚町を取材する機会があった(03年11月号)。それをきっかけに、小さな酪農を営みながら生涯学習の私塾「瀬棚フォルケホイスコーレ」を主宰していた河村正人さん(1942年、山口県生まれ)のお宅に何度か通った。

出版後、東京の動物保護団体「地球生物会議(ALIVE)」の代表・野上ふさ子さん(12年に他界)から電話が入った。拙著に載せた断尾された乳牛の写真を提供してほしい、という。
日高地方で暮らした経験もある野上さんのことは、知己のアイヌの女性から「一緒に二風谷ダムの建設反対運動に関わった」と聞いていたが、面識はなかった。当時は、断尾に強い嫌悪感を抱いて写真を掲載したもので、アニマルウェルフェア(家畜福祉・AW)と関連づけて深く考察する内容ではなかった。

60年代末に新規就農した河村さんは、腹が空いた、発情、喧嘩、お産山中に隠した子牛を呼ぶ、友を悼む慟哭――この6種類の牛の声を聞き分けられるようになったという。
朝の搾乳前に山へ向かうと、窪みに落ちて死んだ牛の脚が杭のように立っている。裏手に牛たちがいたのでムチを振り下ろして坂道を追うが、途中で先頭の牛がいきなり止まり、仲間を見つけて疾走し始めた。死んだ牛を真ん中に円い輪ができて、鼻を押しつけ、匂いを嗅ぎながら首を振り、1頭が空を仰いで吠えるように大声を放つ。他の牛も遠吠えを始め、去ろうとしない――。



コロナ禍の最中だった2020年夏、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」のAW企画で足寄町の「ありがとう牧場」を見学。広大な草地で放牧酪農を行ない、牛が牛らしく生きる

それが変容するのは、明治初期に宮中に対する肉食禁止令が解除されてからだ。第2次世界大戦後に日本を占領したアメリカは、日本人の食生活を変え、農畜産物の一大消費地

や食品関連企業、行政関係者らの関心は高まってきたものの、正直まだぞよ風程度だと思っ。パック詰めされて店頭には並ぶ肉・肉加工品、牛乳・乳製品、卵の値段や味には関心を示しても、飼育実態に思いをめぐらす消費者はそう多くなく、生産現場で実践する人も少数派である。日本のAWの水準がEU(欧州連合)並みになるには、かなりの年数が必要なのだろう。

実現させたい「AW推進法」や牛たちが天寿を全うできる牧場

もともと日本は動物福祉の先進国で、律令時代から12世紀もの間、一部の野生動物を除き、殺生や肉食が禁止された。根底には「山川草木みな成仏」(自然界すべてが仏性を持つ)の思想や「不殺生戒」の教えがあり、これらが神道の穢れ観に反映し、肉食をタブー視する食文化がつけられた。牛馬は役畜として扱われ、肉や乳を得る動物ではなかった。



「北海道・農業と動物福祉の研究会」が開いたセミナー(右端は筆者・15年1月、札幌市内で)

最低基準が狭すぎ、輸送や屠殺に関する具体的な条項もないなどの問題点を抱えていた(現在も同様)。このころ(約20年前)、野上さんが運営する地球生物会議は会員数2千人と国内最大の保護団体。「家畜福祉に明るい研究者がいますよ」と、日本獣医畜産大学教授(農業経済学)で「農業と動物福祉の研究会」02年設立。のちに解散の代表だった松木洋一さんを紹介してくれた(別項の05年3月号再録インタビューを参照)。同研究会は、家畜福祉の普及をめざす先駆的な団体で、セミナーやシンポジウムの開催を中心にすえ、ゆるやかな活動を進めており、松木さんに勧められ、わたしも入会した。

道内初のAW普及団体を設立しようやく吹き始めたぞよ風」この研究会を通じて「家畜の健康と福祉」をめぐる最新事情を学ぶことができ、その一端は本シリーズで紹介し、ALIVEによる畜産関連の活動にも協力した。しかし、関係者の家畜福祉に対する認識はまだ乏しく、道農政部の畜産担当者に取材すると、答えを持ち合わせない。12階(動物愛護を所管する環境生活部)

にさせる食料戦略を採った。こうした歴史的な経緯が、家畜の拘束と濃厚飼料の多給に象徴される、工場型畜産の問題の根底にある。そうした構造的な問題も含めてこのテーマを扱う研究者の層は厚くない。農水大臣が立件されたAWの国際基準をめぐる鶏卵汚職事件が物語るように、行政のトップはずっと業界側を向いてきた。現状を憂慮する役人もいるだろうが、通達などの形で発出されるAWのガイドラインには数値目標がなく、実効性に疑問符がつく。議員立法で20年近く前に

有機農業推進法が制定された一方で、AWを推進する基本法はまだ存在しない。近年、鶏の「ケージフリー卵」を扱う小売店や生協、食品企業、レストランなどが少しずつ増えてきた。国内外の動きを敏感に受け止め、流通・販売サイドから消費者に購買行動の変化を促すことにもつながっており、明日への希望が持てる。前出の経緯をたどり、家畜福祉の普及・推進に向けた試みを続けてきたわたしには、「AWについて知りたい」「動物たちとのより良い関係を創っていきたい」と考える若い世代が増えてきた、という実感がある。そうした中でも生産現場からAWを実践し、発信する人はまだ少ない。このあたりで座学と現場研修などをセットにした、寺子屋的な「アニマルウェルフェアの学校」の試みが必要な時期ではなからうか。人と動物とのより良い関係を築き、乳牛の終生飼育をめざす、牛たちが天寿を全うできる牧場を身近な地域に創れないか。こう考えたわ

北海道下川町に移住して「牛たちが天寿を全うできる牧場」を創りませんか

「アニマルウェルフェア(家畜福祉)の里づくり」をめざして

牧場づくりのイメージは？

- ・牛、鶏の飼育や動物の健康を最優先に考える
- ・動物のストレスを減らす
- ・動物の健康を最優先に考える
- ・動物の健康を最優先に考える

ごんはんにあてて

- ・牛、鶏の飼育や動物の健康を最優先に考える
- ・動物のストレスを減らす
- ・動物の健康を最優先に考える
- ・動物の健康を最優先に考える

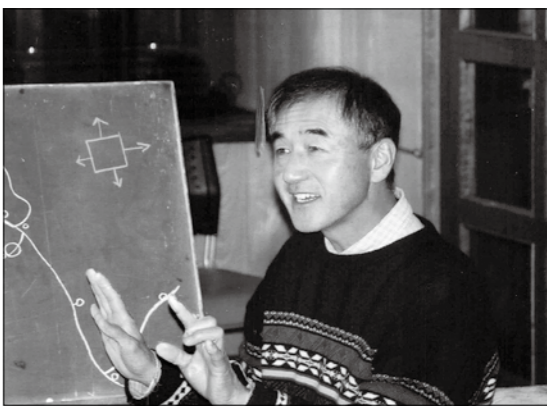
飼育可能な畜産物

利用したい畜産物

たしは昨年暮れ、「アニマルウェルフェアの里づくり」を志す人を下川町内に呼び込む試みを始めた(右のチラシ参照)。候補地を用意し、地元有志による支援態勢も準備中だ。前述の試行錯誤を基に具体的な形にして残したい。この呼びかけに応え核になる人が登場することに期待しつつ、今後もAWの普及活動に関わっていきたく願っている。

下川町で始めた「天寿を全うできる牧場づくり」に向けた案内チラシ

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」<https://takikawa-essay.com/>に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。



「6種類の牛の鳴き声を聞き分けられるようになった」と語った、瀬棚町(当時)の河村正人さん

その鳴き声と固い円陣が心の奥底に焼きついた、と河村さん。当時は、「調教と称して搾乳時に脚を上げる牛を椅子で強く叩いたが、あの声は死んだ仲間を悼む慟哭だったかもしれない」と気づく。少しずつ牛との接し方が変わり、有機酪農や家畜福祉を志向する牧場になっていく……。そんな話を耳を傾ける中で、「牛と人間との関わりを、どう変えていけばいいのかわ？」を掘り下げてみよう、と考えるに至った。



「人間や生乳が汚れる」などを理由に断尾された牛。行政側も改善指導に乗り出したが、未だに尻尾を落とす農場も

で聞いてくれ。「そんな無責任な話があるか！」と憤慨し、幹部に抗議したことを思い出す。規模拡大に伴う省力化が進む中で、昔はなかった尻尾のない牛が増えてきた。90年代以降の話だ。動物の身体に不要なものはない。尻尾には外敵を追い払う役割があり、感情のありようも表現する。糞尿で人の体や生乳が汚れるなどの理由で尻尾を落とされた牛を見るたびにおぞましく感じ、憤りを覚える——家畜福祉に対する無理解を象徴する事例として、誌面で何度も指摘した。のちに朝日新聞の記者が断尾の記事(写真は筆者提供)を書いたり、農

林水産省も「好ましくない」と指摘し、改善の方向に向かう。しかし、昨秋訪れた放牧酪農場で大方の牛が断尾されている姿を目撃し、「まだ、こんな状態なんだ」と暗澹たる気持ちになった。生産現場にAWの基本的な認識が浸透していないのだ。2013年に十勝を訪れた松木さんから「酪農や畜産が盛んな北海道で、AWのネットワークを創れないか」との提案があり、翌年には有志10人ほどで「北海道・農業と動物福祉の研究会」を設立した。道内初の家畜福祉に特化した研究会で、学習会や見学会などを実施した(15年4月号)。

16年には、AWの認証事業を始めるにあたり研究会を法人化し、(一社)アニマルウェルフェア畜産協会に改組している。同協会の役員も務めたが、認証事業や組織運営に対する見解の違いなどから22年度限りで退会。ここ数年は、自身のライフワークのひとつとして、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の中で、AW関連の市民講座などの活動が続けてきた(23年9月号で紹介)。

わたしが家畜福祉の勉強を始めた20年ほど前に比べると、畜産関係者